

妊娠中毒症妊婦に対する体位変換時の心血管系反応に関する検討

産科分娩部：発表者 ○木南 園子

松本あつ子・山口 文子・原田 由紀・久保田裕子
中嶋 薫・伊藤 寿美・池田紀美子

体位変換，特に正常人の head - up に際しては心臓への静脈還流の減少にもとづく低血圧に対して血圧を一定に維持するために圧受容体を介する神経反射機序が存在していることは良く知られており，これらの受容体の求心性神経の賦活程度によって遠心性交感神経活動が調節されている。

また妊婦では循環血液量が増加しているために，神経性血圧調節機構の調節能が低下していることも推察されている。

今回，中毒症妊婦における圧受容体（頸動脈洞，大動脈弓）の調節能の変化を血圧などの変動状況から観察した。対象は，非妊婦（C群）13名，36周以後の正常妊婦（N群）11名，高血圧型の中毒症妊婦（H群）6名の三群であり，方法としては上半身の挙上により圧受容体の変化を発生させその前後の血圧，心拍数，下腿皮膚血流量，胎児心拍数の変化について検討した。

尚，下腿皮膚血管に関してマンシエット加圧による駆血後の反応性充血についても検討した。

前述の方法による心拍数の変化量はC群，N群に比べH群が 15 ± 6 回/分と他の二群より有意に高い上昇を示し，また血圧の変化量は全ての群において上昇したが，H群では 17 ± 5 mmHgとN群に比べて有意な上昇を示した。

起座に伴う皮膚血流量の変化量，駆血後の反応性充血については各群間で有意差が認められなかった。

本報告の結論としては，高血圧型中毒症妊婦では体位変換などによる血圧変動によって誘発される圧受容体反射の心血管調節能が高まっており，交感神経活動が高進していることが推察された。言い換えると，高血圧型妊婦では正常妊婦に比べて起座による低血圧後の反射性血圧上昇が著明であり反射性調節能が高進していると思われる。

この様な成績から，妊婦の体位変換を行う機会の多い助産婦としては，高血圧型妊婦に対して病態生理を考慮した注意深い介助が必要であることを示唆している成績といえる。